
〈座談会〉 **—われわれはどこへ向うのか—**

大いなる転換と 新たな出発のために

出席者 山川 乱 岡崎 勝 ひらおかひとし
土田兼二 深川克己 司会 海津隆志



前衛 6、7月号 No.325、6

〈座談会〉 —われわれはどこへ向うのか—

大いなる転換と 新たな出発のために

出席者 山川 乱 岡崎 勝 ひらおかひとし
土田兼二 深川克己 司会 海津隆志

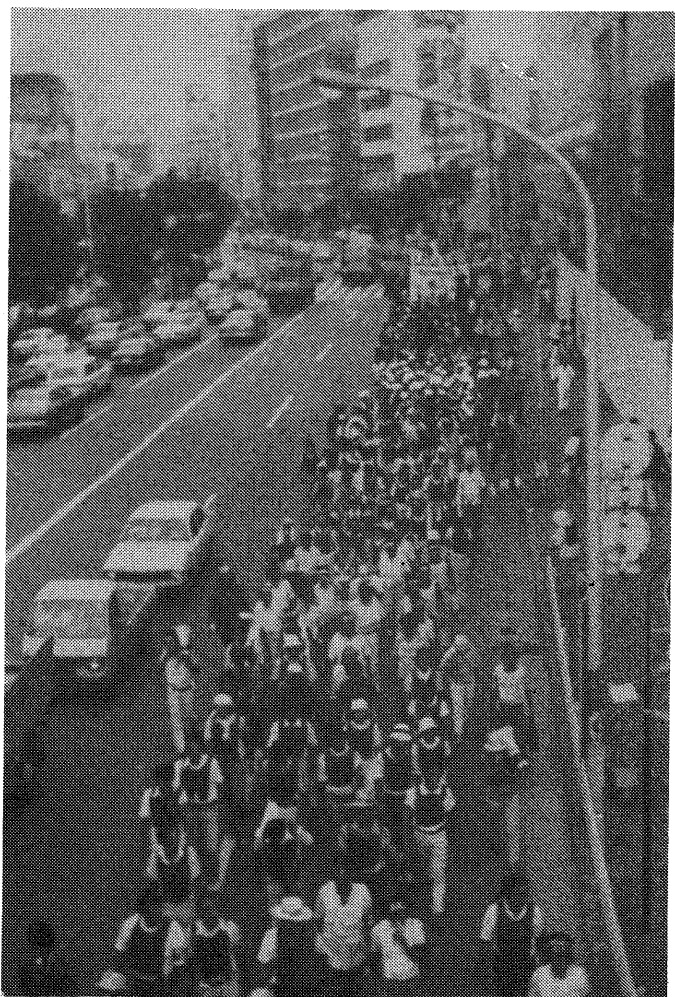
司会 まず深川さんから、簡単に問題提起をしてください。
最低限どうしても確認しておかなければならないことが一つあります。
それは、この間組織の解散というか改編というかの議論が進行していて、その一方で新しい雑誌の発行の話もあるわけですが、中央委員ク

問われているのは運動の転換

一、みのある討論のために

ラスのなかにも事態の推移をつかみかねている感じがあるということ。まして現場のメンバーともなると、基本的に「自分とは関係ない話だ」という受け止め方になっている気がします。

結局、「新雑誌」の発行のスタイルという形態というのかの話が先行しているクライのあるところが問題なのではないか。もちろん、雑誌の発行の形態は発行する主体のあり方に関係し、したがってまたわれわれの組織をどう変え



若くは丸

87年版防衛白書が発表された。洋上防衛から本土防空へ。朝日はその特徴をこう報じている。「侵攻部隊は上陸地点を選択する主導権を保有しており、これらすべてを洋上で撃破するのは困難だから、北海道上陸等に備え「北部日本の防衛を重視」するのだそうだ。何を今更、という気がする。もともと日本の沿岸は二千キロを越える。一步も敵を上陸させないという想定が不可能なことは、軍事の常識だった。にもかかわらずそうした虚構は、「安保と自衛隊があれば戦争は起こらない」という命題を維持するため、飽もせず唱え続けられた。「戦争は御免だ」という日本人を、「タダでいいから安保に乗ってよ」と口説く手管だったわけだ。それがレーガンによる平和では満足せず、核・通常の別を問わず戦争では必ず勝つ」という絶対的優位を求めたのである。「負けると判ればソ連も歯向うまい。アメリカの望む形の平和がくる」。ジャンジャン。当然、「使うための核兵器」がマジで開発されることになる。「使ったら双方共倒れだから抑止力になる」とする従来の核概念の大転換である。欧州への戦域核の配備も

S D I の開発も、すべてこの発想から出てきた。▼「シーレーン防衛もその産物である。当時本誌でも暴露したように、一千海里の海上輸送路の確保など不可能である。理由は簡単だ。「どこを攻めるかの主導権は敵にある」からだ。▼真の狙いは北太平洋を越えて対ソ攻撃に向う米艦隊への、自衛隊の支援体制の確立にあった。対潜能力の向上、三海峡封鎖等々がそれである。ようするに自衛隊の実戦部隊化ということだ。海上交通の安全云々は、「そういえば日本人は納得する」という読みの結果であった(余談だが、一番素直に信じて「大東亜共栄圏の再現」と大騒ぎしたのは一部左翼諸君である)▼「洋上防空で日本の海空軍はその位置を明らかにされた。本土防空」で陸軍の役割が与えられたことになる。実戦部隊化構想のさらなる具体化だ。▼その帰結は「北海道の予定戦場化」である。北海道に米軍基地はなく三沢に最大級のそれがあることから判るように、これも一部では常識だった。有体にいえば「北海道は防衛の圏外に置かれ、戦車とミサイルによる殺りくの場に「予定」されているということだ。▼「このことをドキュメント仕立ての本にしたら北海道の安保支持者は激減するだろうな。これは僕の発言。徒らに対ソ戦の恐怖を煽るのは反ソ宣伝への加担につながる」。これはさる党派の人のお言葉。

本号の誌面

ブラック・ホール……………2

大いなる転換と新たな出発のために……………3

一、みのある討論のために……………3

二、何からの転換なのか……………6

三、運動と主体の再生をめざして……………11

四、対案は運動の対案である……………15

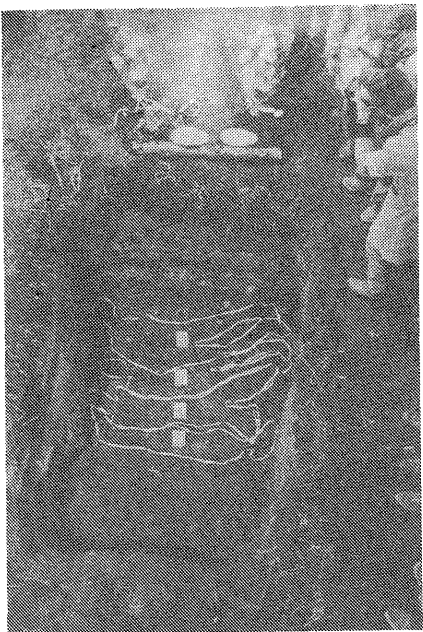
表紙のことば……………18

表紙 空間工房

ていくのかという問題にも関連するわけで、その意味ではないようにかかわるんですけれど、それはいわゆる組織論のレベルのことにすぎない。

今一番重要なのは、「運動の転換が要る」ということについての合意の形成ではないか。それがあれば、「だから組織の転換も必要だ」「新しい雑誌の発行も必要だ」「新しい統一戦線も必要だ」というふうな話も進むのだろうけれど、そうはなっていない。いや、運動について言う場合でも、われわれが実際関わっているいくつかの運動をどう発展させていくか、あるいはどう組み合わせながら新しい運動の流れを創っていくかではなく、一般論としてしか語ってないような気がする。要するに運動形成に運動論が先行し、しかも、それにさらに組織論が先行していた、ということですか。これじゃイメージも具体化しないし、みんなに伝わりもしないだろう。

このことが同時に、今われわれがやろうとし



ている試みに「積極的な路線転換」のイメージが欠けている印象を与える理由になっている気がします。なんかこう、内も外もシリ貧になっている組織の現状を追認しているだけ、と取られかねない。

以前からよく「前衛派とつきあう組織はみんな解体作用を受ける」とみたいな話がありました。結局のところその報いで、ウチが今解体されつつあるみたいなことで終わってしまいはしないだろうか。(笑い)

そんなこんなで、現場のメンバーには「転換」はかならずしも魅力あるものと受け取られてはいないようだし、自分たちには直接関係ないという感じになっている。ひるがえっていえば、このことは「転換」を提起しているわれわれの側に対する突きつけでもある。つまり、場当たり主義、なしくずし、無責任、追認主義、消極主義を現実に払拭しえているかということですね。

敵の出方論の水準ですらない

深川 そこで、「日本における運動の転換」にもう一度話を戻してみたいと思います。

そのためにはまず、日本の運動の現状があまりにも「異常」であることの確認が必要じゃないでしょうか。この点については本誌三〇五号(八五年十月号)の新左翼運動の総括をめぐる座談会でも言ったんですが、それが今日にいたるまで日本の左翼の団体や活動家に自覚されて

いない。

というのは、いわゆる先進国を見た場合、西ヨーロッパやアメリカの運動と日本のそれは、明らかにその軌跡が描くカーブが大きく異なっているということですか。いや正確に言うとう、六〇年代後半から高揚を迎え、七〇年前後にはあいついで武装闘争路線が登場する、しかもそれが七〇年代前半で早くも一頓挫し、運動全体も深刻な停滞局面に入る、というところでは一緒なんですよ。ところがその後が違う。

欧米の場合、七〇年代後半から反核・反原発の闘争が、それ以前とは異質でしかもかつてないような規模で盛り上がった。そのところの切開が重要なんじゃないでしょうか。

その理由を僕は「日本では武装闘争路線の清算が不徹底だった。」というところに求めています。日本の武闘路線は「連合赤軍」の浅間銃撃戦という形で初めて実践され、しかもそれが同時に「血の粛清」の暴露と相まって、その幕切れをも兼ねることとなったわけですが、そのところの確認が不十分な気がする。つまり、破産が破産として確認されていない。なんかみんな、妙に心情的に受け止めてしまっていて、路線としての是非を判断するというレベルには至っていない。その結果、逆に「身上としての武闘主義」を曖昧なまま引きずり続けることになる。現実の実践としてはやる気もないけれど「暴力革命」が看板としてだけ残っている。

それは、いわゆる「敵の出方論」の水準ですらないですね。つまり、情勢との見合いで方

針を決めるという基本すら失われている。現実との関連抜きに理論も方針も出てくる構造になっている。だから自派の路線と無関係に、当面の「しぎ」としていろいろ手を付けたりすることに。あるいは、文字通りのマヌーバーとして日々の実践が位置付けられることになる。理念と実態、理論と実践が野放図に分離するわけですね。

だから、オルグの対象も限られてくる。古い活動家の維持にきゅうきゅうとするというのが実態に近くなる。新左翼の老化現象が起こる。(笑い) もっとも、若い連中がぜんぜん入ってこないということではない。ただ、今の若者の意識状況から見ると、それはほんの少数で例

「多元性」の保障について

深川 もう一つは、運動、理論、組織、の多元性の保障の問題ですね。今日日本でも、さすがに「唯一の前衛党」をおおっぴらに口にする党派なり左翼人は少なくなっただけ、それも大半は本音を隠しているだけなんです。言うのが恥ずかしいから。(笑い)

たとえば一時もてはやされたフランスの現代思想でもね、あそこで言われた「リゾーム」(根茎)という言葉は、運動における多元主義やネットワーク、それに分権主義との絡みで自主管理・自主決定という考え方と、理論的にも実践上も通底している。ところが、それを紹介

外にすぎない。しかも、日本的共同体への参加によるアイデンティティーの確認を求め、といったケースが多いんです。そういう連中にとっては、党派の内部結束のために理論が存在するという新左翼の現状がピッタリなんです。(笑い)

その点、欧米では運動と理論が完全に一転換している。その象徴が「非暴力直接行動」ですね。非暴力とは言うんだけど、日本の新左翼の中途半端な「暴力の行使」よりはよっぽどラディカルな闘い方になっている。妙に過去を引きずっていない分だけ、「今なにが必要か」「今なにが有効か」がよく見えているんだと思います。

しているにほんの文化人は驚くほど狭量で、おたがいに悪口を言いあったり、足を引っ張りあっている。あそこの翻訳がまちがっているとか、俺のほうが先に目をつけたんだとか。(笑い) しかも最近では「デリタもガタリも古い」とか何とか言い出した。

でも、その「古い」という意味は、「一通り紹介しつくした」ということにすぎない。その実態というか背景というか、肝心の運動のほうに転換の緒についたとすらいえないのに、もうそんなふうになっている。これじゃ「ヨコ文字をタテ文字に直すだけの翻訳文化」といわれてもしょうがない。実はこの間、現代思想関係の出版で有名な某出版社の人とあったんだけど、「もうやるのがなくなったから、一昔前



の分析哲学の仕事なんかをポチポチやってる」なんていつている。ま、この人の場合、真剣に悩んでいる様子が伝わってくるから救いなんだけ。

それにしてもね、僕なんかウットゲンシュタインみたいに、形式論理丸出しのテーゼ風の文章を、しかも番号付で並べていくというスタイルが肌に合わない。リゴリズム(厳密主義)から真理が生れるという幻想の束縛からまた逃れられないのか、なんて思ってしまう。しかもそのリゴリズムを本人自身が維持できなくなってしまうんですから。その点に彼の誠実さが表われている、といえはそれまでなんだけども。

結合媒体の未成熟

深川 それから、これが最後の問題なんです。そうした多元的な主体を相互に結合させる媒体が日本で未成熟なこと。たとえば西ドイツの緑の党におけるシュタイナー派の存在ですね。だいたいシュタイナー自身の言説は宗教的なし神秘主義的で、ぼくなんか理解しきれないところがある。「自由・平等・友愛」を原則とした「三層社会論」というのは例外的に理解自体は可能ですけどね。これは「商品を残す」というやつで、例の中西洋の「友愛宣言」も、実はこれがネタ本だったわけですが。

だから問題は、彼らが客観的に果たしている役割で、たとえば緑の党の集会で左右の論争が起った場合ですね。あそこは保守党から過激派の残党まで潜り込んでいるから、そういうことはしょっちゅうだったらしい。そうすると主流派の「だから集会の真ん中に位置しているらしいんですが（笑い）——シュタイナー派が一斉に瞑想をはじめ。そうすると論争やっていた連中はしらけるわ、ほかの連中も瞑想に加わるわで、論争そのものがグジュグジュになって雲散霧消してしまうという。（笑い） 実際は、たいがいの論争なんて意味のないものが多いです。だから、これでいいわけです。現代思想風には「ロゴス（論理、言葉）が超えられた」ということになる。（笑い）

今、日本では猫も杓子も緑の党、という感じ

り込んでしまう特殊日本の体制の手法みたいなものもあるんじゃないか……

深川 今の発言で、政治国家にいかにか有効にふれえたか、を基準にモノを言ってるようだけど、そこから転換を言うのは「逆効果」だと思ふ。なにしろ、政治国家に直接ふれたくて、ふれたくてしょうがなくて、それで焦っているのが今の新左翼なんだから。むしろ逆に、いきなり全体と切り結ぶんじゃないかって、たとえば自治体とか地域とか、そういう部分と関わっていくというふうに関わり替わっていないことが問題なんだと思う。

それから、新左翼の行動原理を直接行動と規定するのは無理がある。それは非暴力直接行動型のラディカルリズムと比べればすぐわかる。とくに七〇年代に入ってから、いろんな争議の支援なんかに行くと「実力闘争でたたかう」とかすぐに言いたがる。空語化しているんだよね。実際何をやっているかといったらせいぜいスクラムデモくらいで、それを「実力闘争」なんていっちゃうから錯覚がおこる。

デモはデモなんだよ。あくまで示威行進であり宣伝が目的でいいんだよ。ジイちゃん、バアちゃん、五、六人でプラカード持って、ホイウトハウスのまえを行ったり来たりするより、スクラムデモのほうが上だなんてことは絶対ない。

岡崎 それはまあ、広い意味で戦略問題に属する事柄で……。しかも従来の左翼理論の蓄積だけではすまない困難もあるわけでしょう。

だけど、肝心のところでえらい勘違いしている人が多い。「緑の党でなく『緑の人々』と訳すべきだ」とか、「いや逆だ」とかね。実際は、両方の勢力がいるわけですよ、それが「緑の党」なんだから。「党中央」を考えて「前衛党の再建」を構想している集団だっているはずだと思ふ。ところが日本の左翼は、緑の党を総体として理解しようとせず、最も左派的な部分とか自分に近い部分を探し出してきて、「あれはいいから提携すべきだが、ほかはダメだ」とか言いたがる。

ところが日本の場合、内ゲバをやっている党派の間に割ってはいってまとめる力量のある主体がない。一時期ね、総評とか、社会党と

二、何かからの転換なのか

直接行動って何だろう

岡崎 今の話ではね、これまでの運動が手詰って転換が要求されている、それにたいして新左翼は従来のパターンを踏襲している、というん



深川 そんなに高尚な話じゃないんだよ。岡崎 新左翼の方法には、やっぱり七〇年代の夢があるわけでしょう。

深川 そこが問題なんだよ。それをそのままひきずっている。だから現実と齟齬をきたすことになる。

司会 実際には七〇年以降はぜんぜん直接行動じゃなかったと思う。理念のなかでのということ、形骸化されたとかいうものではあってもね。

山川 運動の転換というのね、中央権力にたいして地方議員になって地方から攻めるとかいうことでもなくて、自分たちのまわりの運動状況なり、生活のあり方を変えるような、そういう運動に転換するということじゃないか。もちろんその場合、必要な場合に地方なり中央政府なりの政策を変えるということも出てくるわけだけれど。

か、あるいは解放同盟とかをそれに擬した人もいるんだけど、そうはならなかった。もちろん日本でシュタイナー派と同じ存在を求めるとは無理な話であるわけですが……

あと、生活クラブ生協の「ネットワーク」なんか別な意味で「結合媒体」になりうると思ふんだけど、まだよくわからないところがある。また、あれが実体を持てば持ったで、それとほかがどういう関係をつくっていくか、という問題は残るし……

司会 とりあえず報告はそこで打ち切ってください。あとはいざし討論が一区切りついたところでもう一度やらせようということにして。

だけど、「手詰まったから転換する」という従来の「転換」とは違うんじゃないのか。新左翼の場合は直接行動がパターンで、七〇年代に学生運動が手詰まって労働運動、それも手詰まって住民運動という転換だった。

でも体制の危機、打倒の好機といわれた七〇年代に詰まった最大の原因は、その直接行動が社会なり、政治国家なりに手が届かなかったというところにあるんじゃないか。

それに、主体の側の原因だけじゃなくて、現代社会に生起する様々な問題を自分の内側に取

不十分というなら、そのように転換できていないということであり、ほくら自身にしても、社会運動への転換を言って五年くらい経つけど、これまでと違い、いまだに具体的内容が伴いきれていないようだ。

ヨコの動きをタテにつかもうとし

司会 一つの視点としては、タテ型運動とヨコ型運動と分けるとハッキリすると思う。それとまた、転換とこだわりの区別をするというか、何を継承し、どこを根本的に転換させるのか、そのつきあわせがある。運動というものは継承性を持たないかぎり力を持たないと思うから。われわれの場合、全共闘運動から工場闘争という工場全共闘運動への転換があったわけだけど、その際、全共闘運動というもののつかみ方は、民衆の自己解放運動という視点なり発想が一応中心にあった。

ところが新左翼の場合は、そこが切替わっていない。彼らにしても、大衆運動の効用は評価するが、それは「昔の言葉」で言えば、「高度な自然発生性」ということで、より高次の段階に引き上げなければ、ということに結局はなってしまう。それが要するにタテ型の運動に組織し直すということに帰結する。

山川 つまり党に集約するということになる。

司会 そこまで言わなくて、党に率いられた軍団とか、党のものと活動家集団とかね。

実は旧左翼の側も似たようなことが言えて、たとえば総評労働運動が崩れる局面で一つには「会社組合」というタテ型の関係が出てくる。これはもう、企業内または単組↓産別↓中央といった出世ルートのタテ型そのものだし、もう一方の共産党系を見た場合、戦前の評議会、戦後の産別組織をみても、党に率いられたタテ型運動になっていた。

今の統一労組態がすべてそれと同じといえるかどうかは別にしても、そういう傾向はやはりある。新左翼についても、これらに対抗して自分らのタテ型系列を、といった傾向があるんじゃないか。そこにわれわれとのズレがある。

ところがわれわれも、出発点の認識とは裏腹に、やはりヨコ型運動の波及の媒介として、党の下に直接行動組織を、と考えてしまった。学生の場合の共産主義武装行動委員会とか、党の下の工場・職場行動委員会運動とかね。いまやろうとしているのは、ホントにヨコ型の運動なんだけど、それを定着できるかが問題なのだと思

エネルギーとしての原理主義

山川 たしかに、全共闘のヨコ型性格を評価しつつそれをタテ型につかもうとしたというのが転換すべきポイントというのは当たってる。それともう一つあって、全共闘運動の持っていた多様性というものをつかんでいたかどうかということがある。のちに綱領の問題にし「第2章

う。

ひらおか 社会運動をヨコ型のそれとしてみる、それぞれ具体的な課題をもち、その意味でまた固有の狭さも持っている。それに対するわれわれの位置はどうかというと、下手をするとやはり旧来型の「指導部」になっちゃう。そこはあまり変わってなかった。緑の党のように運動の展開のなから固有の党的機能を見出すというのもあると思うんだけど。

ところが、そこがはっきりしないまま、たとえば社会運動や現代思想をテーマにした研究会を続けてきたり、『前衛』の編集を続けてきた。その一方で、社会運動とクロスオーバーする形の労働運動を展開してきた地域合同労組や、生協運動や石鹸運動をやっている仲間がいる。にもかかわらず、こうしたグループに対するコーディネーター（調整役）としてはほとんど機能していない。そこが「指導部」としてのわれわれの位置が何年か曖昧だった理由だと思う。

案」をまとめていく過程でも、どうしても頭には入らなかった構造がそこにあった。つまりすべての運動や流れを階級的な方向に集約しようとする発想から自由じゃなかったということ。実際の運動はそうはいかなくて、多元的なものなんだが、たとえば障害者の運動とか、そこがわからなかった。すべての階級に集約するという方向になっていけば、それをさらに党へ、という方向にいくのは簡単な話だった。

中する」ということね。その前は徹底的に学生に、さらにその前は街頭に、ということだったんだけど、その裏には全体の情勢を把握し、その判断の下でいかに自分たちが有効に動こうとするかと考えると、やはりどこかに集中しようとすることになる。つまり有効性という考え方はあると思う。もちろん、その裏付けとしての分析が的確かどうかということがあっての話だ。

このスタイルが崩れるきっかけは、やはり工場での合理化にあるわけで、それは六〇年代後半から始まり八〇年代のME化などで確立した。そういう情勢の変化そのものが転換を要求している側面も見落としてはならない。それがあったから、以前のわれわれのやり方は少なからぬ刺激と共感を生んだと思う。その意味ではやりがいがあった。

司会 たしかにね、問題意識はそれなりに鮮明で、そういう意義もあったと思うけど、それも社会関係をリアルに追っていったって得たというよりも、原理から入っていったという側面が強いんじゃないか。

ひらおか といっても、階級関係が不鮮明になったという現状自体、労使関係の日本的あり方がその原因になっているわけだし、そこが主戦場であるという認識も、そこを軸に全体が展開していたという認識も間違っていない。ただ、そこから闘いを組立てるには、やや非力であり、しかも対応も遅かったという事実があった。とうていわれわれの立てた構想を実現

深川 「タテ型」の中味の理解がぼくはちょっと違って、実際には最初から最後まで党なんて言える代物ではなかったのがぼくらの実体だったと思う。だいたい発足時の、百名足らずの学生を率いて七〇安保闘争の流れを変えようなんて発想がムチャクチャで、どんなに少数であっても自分らが中心という……。(笑)

工場闘争に転換してからもね、自らでどっかに拠点をつくりそこでやれば他に波及するという発想があった。機関紙も、すべての原点はわれわれにあるということで、それをもとに動いた部分に意味付けを与えていくというところがあった。まっしぐらに一団となって突き進んでいくという印象を外に与えたと思う。だからそういう内向けのスタイルでは、外から注目されるが統一戦線は永続きしない。ちょっと壁にぶつかるとすぐにあきらめてしまうところがあるんじゃないか。「外向け」の思考ならなんとか維持しようとするんだろうけど。

社会運動の場合、とくに、そこが一番心配だね。雑誌でいくら宣伝してもそれだけじゃ力にならない。というより、理論と実践または実行と宣伝の分業ということ自体、社会運動と相容れない存在だからね。

司会 すべての矛盾や対立を工場内の階級関係に還元し、このところに普遍性を見出してそこで徹底的にやろうとしてきた時期があったわけだけど、その総括が大事なんじゃないか。その場合、一つには原理としての普遍性でなく行動としてのお互いの関係をたてる考え方があ

する力もてなかったし、そういう闘いで明らかに破れたわけだ。

そして、その裏面というかそれとのズレのような形で、今の非常に特異な社会状況につながる変化が急ピッチで進んだ。本当は転換しながら対応しなければならなかったらうけど、そうはならなかった。そこで、現実と前衛党論の建前との落差がどうしようもない形で暴露され、いやおうなしの転換に踏み切ることになったわけだ。

深川 そのところは正しいと思う。ただ、今の組織の現状は、単なる転換の遅れだけでは説明できないんじゃないか。つまり、「一点集中型」の運動論というのは一種の利那主義を含んでいて、「ここでやらなきゃいっさいが無に帰す」とかいう思考がどこかにある。だからその目論見自体がうまくいかないと何も残らなくなる。「何か残そう」という考えがないんですよね。

ま、ふつうは「組織を残す」という話になるんだけど、それは別としても、とにかく日本の左翼には長期展望という発想が欠けているんじゃないか。

司会 反乱と主体の形成は、いわゆるトレードオフというか二律背反の関係にあると思う。主体の積み重ねと全体の波の波長がうまく合うと、社会変革もうまくいくのだからうけれど、われわれの場合、反乱の側にウェイトがかかりすぎていた……。

山川 「反乱で反乱を組織する」とか(笑い)

り、もう一つは、労働運動自体自体が社会運動型に転換しなければいけないということがある。この二つが重要だと思ふ。

岡崎 階級対立の図式でやってきた労働運動からの転換とか、われわれの立場がその過程で不明確になってきているというんだけど、そういうられると先が見えなくなってくる、そこはどうなんですか。

やはり背景には情勢の変化があった

ひらおか 司会者のいった「徹底的に工場に集



「現場」にのっての転換とは何か

司会 今までみんな労働運動でやって来たわけだけど、その人達にとって社会運動型への転換とは何か、に答えることが急務なんだよね。

土田 それが大問題なんだ。

山川 それもそうだが、中央のメンバー一人一人がどう転換するかも問われている。

土田 そうなんだよな。たまんないよ、生活が。(笑い)

司会 前者、つまり現場の転換はどうなるんでしょう。

山川 たとえば郵便労働者なら、住民運動の媒介者になりうる。実際、地区労なんかより具体的なネットワークを仕事の中に生かしている局員はいる。

ひらおか 東大社研の戸塚さんのように、外国人や女性労働者の差別問題を労組がどうとりあげるかに鍵があるという考え方もある。国鉄における膨大な下請け労働者の存在をみる時、国労が一回でもその問題をとりあげたのか、何かやったことがあるのか、というんだね。公害と労働組合の関係もそうだ。

逆に、そこを通り抜けると、社会運動と重なるような運動が現われてくる。現にそれをやっている地域合同労組もわれわれの近くにあるんだし。そういう転換を組合がやらないといけないと思う。

深川 コンピューター関連の現場にいるこちら

のメンバーね。よくやっているんだけど、職場と組合だけではどうしても視野が狭くなる。それに運動の節目にさしかかると、どうしても一瞬何をやっていいかわからない時が出てくる。そこで地域に出ていこうということになった。そうすると活動家自身が変わるんだよね。人間関係の作り方の見直しみたいなことをいいたして、それが職場でもいい方向に現われている。

山川 企業内組合の場合、人間関係もその枠内にとどまりがちだから。

司会 職場そのものをみてね、七五年以降の連敗続きで労働条件が賃金をはじめ相当悪くなっている。そのあたりが生活に出てくるから、職場でも必ず話題になってきているのだ。食、教育、老後の生活設計とか、さまざまな形でね。それを組合でとりあげる、全部解決できないとしても、とりあげることで組合員の問題意識の転換がはかれると思う。

山川 労働組合という狭い気がする。かならずしも組合ということじゃなくて、職場世話役がやるとか。

司会 話をとばしたんで誤解を与えるかもしれないけれど、今、われわれのメンバーはかならずしも組合に進出しているんですよ。それ以前にかなり世話役としての経験を積みこんでいるわけです。にもかかわらず、さっきいったような話題については語る内容を持っていない。そこをなんとかしないと……。

土田 そうかな、A君やB君みたいなタイプはいるんじゃないの。

うだったらありえないことで、本来だったら倒産してしまわなきゃと思う。同人誌的な形にして、もっと全体が参加して、知恵もお金も出しあって、社会運動と労働運動を主体にしたいろいろな人の共同の計画の一つにするとか。それが参加の内実だと思うけど、ようするにもっと早く切り換えるべきだった。

それに対する関わり方としてわれわれの位置も出てくると思う。われわれ自身をも社会運動的な関係に置いて、フリーな仕事をもちながら協同組合的に活動するとか。

土田 なんの協同組合？

ひらおか ワーカーズコレクティブ(笑い)

土田 何をやるの？

ひらおか もっとお互いの仕事に関する情報を交換して、仕事を融通しあったりね。そうして自分たちの生活をもちながら、共同の活動をしていく……。

山川 ところが、その彼らにしても、いざ職場にいくと「真面目な組合活動家」としてしかふるまっていないんじゃないかな。

深川 今まではそのへんのところ各人の個性にまかされてきたんですよ。さっきの電機の彼も、ひさしぶりに会ったこちらの女性のメンバーがびっくりするくらい変わった。そのへんをもっと意識的に追求する必要があるんじゃないか。

カイより始めよ

司会 みんな学童保育だとかなんだとか問題を抱えているわけだけど、中小では組合の機関の中に部門を設けて生活相談的な活動をやっているところもある。そこは学ぶべきじゃないかな。

あるいはこの間の「地揚げ」による土地騰貴で、とても自分の家なんかもてない状況になっているが、それならたとえば共同でリゾート地に別荘をたてるとかね。組合活動も暗いイメージばかりではダメなんじゃないか。

土田 それで、あちこちに豪華な「会館」がボンボン建つとか。(笑い)

司会 全通会館にしてもそうなんだけど、組合員の主体性が入る余地がないんだよ。

岡崎 自分たちの手を離れたところで建てられ、運営されているんだもんね。

司会 それにさっき出た下請けとの共闘にしても、たとえば全電通の場合、電通労連とか、そ

深川 心配だな、それで商売になるのかな。半失業者の相互救済運動みたいで、しかも救済にもならないという……。

ひらおか でも、そうすれば仕事に対しても活動に対しても意欲的になれるだろう。

深川 ワーカーズコレクティブって、もうかる仕事じゃないですよ、少なくとも今のところは。中西五州さんのところの「労働者生産事業団」にしても、生活クラブ盛況のワーカーズコレクティブにしても、ほかで給料をもらっている専従活動家の、それこそ献身的な努力で、ようやくしごとを確保している段階でしょう。労力換算した費用対効果の関係でいえば、まだまだぜんぜん割に合っていないですよ。ほかにもうかる事業を探したほうがいいんじゃないかな。

三、運動と主体の再生をめざして

価値観の転換の問われる時代

司会 そろそろ「対案」だとか「雑誌」だとかの話にうつり、討論をしめたいんですが、深川さん、また問題提起をお願いします。

深川 対案については、ぼく自身の考え方も転換しているわけです。その第一は、なんといつても対案のイメージが具体化してきたこと。

今までは、対案という相手の土俵に入り込んでモノをいうことか、そうでないとすると、結局「すべては権力をとってから」みたいなこ



としかなかった。前者の場合だと、たとえば財政再建で問答無用の緊縮財政の大蔵官僚に対し、内需拡大の経済企画庁がケインズ政策の再現で対決するのと本質的に変りがないわけです。

ほくの場合は多少中間的で、政治革命以前の対案の作成と実施の意義は認めるんだけど、今みたいに労働運動が無力な段階では、対案実現の可能性は薄いという考え方だった。

ところが、エコロジックとか農業問題を考えていくとねー本誌八五年五月号の「農業特集」がヒントの一つなんです。もともと現実的な問題だという気がしてきた。結局、この問題をつきつめていくと、日本の産業構造そのものをどうするか、という問題にブチあたるわけですよ。

つまりこの間の日米貿易摩擦が突き出した問題は、日本側の農産物輸入障壁ではなくって、工業製品のつくりすぎ→輸出のしすぎが諸悪の根源だということでしょう。

農業関係者がよくいうように、農業保護は日本の一手専売ではない。フランスなんかは、誰が何といおうと自国の農業は守り抜くと公言してはばからない。日本だけがそうはいえないのは、工業製品をメチャクチャ輸出しているという負目があるからです。その結果、日本の農業は明日をも知れない運命になっている。

つまり、国際的、国内的な「農工不均衡」とその拡大が根本問題なのであって、その是正が問われている。それはまた、戦後日本の支配的イデオロギーである経済偏重、生産力偏重思想

の、それこそ「総決算」を問わずにはおかないものとなっている。したがってまた生活、文化、労働、社会のあり方等一切の反省を迫る契機ともなっていると思うのです。

だから、支配階級自身の動揺ぶりもすさまじい。対応するどころか問題の意味がつかめずオタオタして。大蔵省と通産省の貿易摩擦をめぐる対立は有名だが、それに農水省

がからみ外務省がからみで、四つ巴、五つ巴の構図にもなっている。新聞の論調にしても混乱の極みです。

「とにかく大変だ」「どこかを直さなきゃ」という切迫感はあるが、どこから手をつけたらいいかわからない。一方で「私達は悪くない」「別に悪いことをしてきたつもりはない」という被害者ぶらした意見も出てくる。

だからこれをきっかけに、今こそ生活、文化の一切を見直すキャンペーンをはるべき絶好機なんだと思います。

ネットワークの媒介をめざそう

深川 もう一つのカギは、ネットワークにある。これも本誌前号の「生協」でいわれていますが、生産者と消費者をつなぐ運動ですね。しかもそれをネットワーク化していく。これが資本主義の市場と重なりながら、あるいはスレなが

さつきもいいましたが、現代思想的な多元主義的な考え方は、流行としては広まったが、運動の内部に定着しているわけではない。むしろそれを妨げる要因のほうが目につく。党派がその最たるもので、多元化しようとするうごきをチェックするのが「党」だと思っているらしい。

一方、住民団体なんかの側は、党派がそういう対応に出たとたんソッポをむいてしまう。党派のそういう態度も議論もキライだということ、ムリもないんだけど。

われわれの場合、逆にもっと積極的のうって出て、そうした「ロゴスの暴力」と対決していく必要があるんじゃないか。それがまた自主的な運動の発展を側面から支えていく道でもあると思うんです。

知識人と運動の関係

司会 これまでの党とは全く違った「活動家集団」をつくる場合、その意義はどこにあり、あるいは何をやるのか、このへんから討論をはじめたいと思います。

山川 ネットワークというと、具体的な課題を中心にした運動のネットワークがふつうだ。たとえば、東大の中西準子さんなんかやっている下水処理の問題をめぐるそれとかね。「水情報」という機関誌を出してるんだが、購読者として支えている人が千人以上もいるという。ほくらの場合どうなるか。そういうものの一



ら、独自のネットワークになっていく。それがまた、社会運動のネットワークとも重なっていくことになる。こうした運動は、すでに始まっているわけですが、これを大々的に発展させなければいけない。

「雑誌」についても、こうした社会運動のネットワーク形成の媒体になることをめざすべきだろう。われわれ自身の社会運動を発展させ、その相互の結び付きを図っていくと同時に、外にある運動との提携の強化も必要だ。当然、取材活動にも力を入れなければいけないが、それには金が必要。それをどうやって調達するか。自前の運動を持ってなければ誰も相手にしてくれないだろうけど、かといってほかの運動やネットワークとの関係を押し立てていかないと、「百年河清を待つ」みたいな話になっ

つになるのか。そうじゃないだろう。ある者は具体的に社会運動にあって、ネットワークの鎖の一つになる、もう一つは、専門的な知識人としてそれを側面から援助する。そういう形が考えられる。

そのどちらか、あるいは両方を兼ねるか。さらにまた、「ネットワークのネットワーク」の機能を狙えるか。それを支えるような思想的糧を生産できるか。

司会 たしかに、われわれが運動家そのものになっってしまうということ、運動の経験だけじゃなくて専門的な知識を生かす活動をやるということ、二つあると思います。なんといいても「価値観の転換」が問われているわけだから、連続講座や雑誌などをつうじたそういう活動が求められているんじゃないですか。

深川 ただね、ちょっとひっかかる。社会運動に直接タッチしない知識人の存在を認めることにならないか。それじゃ、せつかく党を否定しても「元の黙阿弥」になってしまう。

新しい社会運動のスタイル

岡崎 かつての政治運動ならビジョンがハッキリしてる。また、危機的情勢の流動化のなかで、身体を賭すことをもいとわれないような、躍動する感覚があった。しかし社会運動では、新保守主義の台頭する「豊かさ」の微温状態のなかで、そこまで打ち込むことに抵抗がありはしないか。言葉は悪いが、「片手間に」ならつきあう気もすけど、「全部差し出せ」といわれて



てしまう。それから、今のような状況の下で運動を続けていこうとすれば、誰でも社会運動にとりくまざるをえなくなる。あるいは、労働運動にして社会運動的に展開せざるをえなくなる。たとえば都下の立川に「自由労組」という日雇の組合があるんですが、聞いたところでは、各自自治体と交渉して年間何千万円かの仕事をまわさせているという。ワーカースコレクティブ的な運動をもうはじめちゃっているわけですよ。そういうのを取材したり、あるいは寄稿してもらって誌面に反映させるとか。そういう形で、いわゆる「書き手と読み手の分業」というものをなくしていかないと、真にみんなを支えるものにはならないと思う。最後は「多元主義的な理論」を構築するという課題です。

もちょっと……。

深川 じゃあ、逆に聞くけど、明日から政治闘争をやるから「全部出せ」といったらそうするわけ？

岡崎 いやいや、そういう対比で話しているんじゃないよ。多様な生き方を表現したいなと思うってことだよ。

深川 政治目標で燃えたというのは昔の話だろ？ それにしても昔のまんまだね。(笑い) ぼくなんかむしろ、最近ようやくハッキリしてきた気がする。逆に言えば、たとえば昔は「社会主義は計画経済でやる」という話はハッキリしてた。でもロシア革命以降の実際の経験は、そこが実は一番ハッキリしていなかったことを暴露した。しかし今のぼくらは、もっと別な形で社会主義建設のてがかりをハッキリつかんでいるということが出来る。

岡崎 昔のことでいえば、たとえばベトナム反戦で闘ったわけだよ、「他人のため」が自分の無上の喜びであるとしてね。何しろ、見たこともない国のために闘ってる、しかも隣では山崎君が死んでる、それでもやるんだということだ。

「ひとのために尽くす」ということと「自分を考えながら活かしていく」ということの緊張感ね、こういう人生や生きがい、それと社会運動……。どうもうまくいえないんだけど。とりあえずはだから「自分のやりたいように生きていく」としかいえない。いきなり話が逆になって悪いんだけど。(笑い)



土田 自分のやりたいこと、あるいは欲しいものなんてのは、ある関係のなかで存在するわけでしょう。自分だけ「やりたい」と思っても、他人と一緒にやらなければ出来ないことも多いし、喜びだって違って来る。たいがい関係のなかで出来るんだ。かならずしも自分の意志だけで決まるものじゃない。

深川 「他人のため」とだけいってやれるのは短い間だよ。

土田 他人のため、といっても自分も面白いからやったんだよ。

岡崎 結局自分のためだったんだよ。今みたいな時代にね、自分のために何かやるという場合、それが社会運動の形をもとめて、わざわざそれを探し出してきてやるほどのことなのかどうか。社会のなかに生活を作った人な人間としては、どうもスムーズに轉換できないんだよ。

深川 岡崎さんはホントはボルシェビキなんだよね、頭のなかは。(笑い) それなのに、まわりに合わせてのわかりが良さそうに振る舞うからムリが起る。

司会 たとえば西ドイツのCOMの運動ね。若い連中がセンターに集まって、時にはディスコをやったりもする。そこで、若い連中のために自分のためにもなっているわけだ。他人のためと自分のためがぜんぜん重なってないなら、そんなのはやめた方がいい。ムリすることはない。

土田 そう、やりたくないならやめればいいんじゃないの。

岡崎 いやいや、いやいやいや。(笑い)

ライフスタイルと生活革命

岡崎 話は変わるけどね、たとえば三里塚からのワンバックの野菜がくる。そうするとね、家の二階に居る若い奴とメシをつくって食ったりするわけだ。コミュニティ的なうるわしい運動として、面倒みてるという……。(笑) そう

するとバックをとりに来た人がそれを見て「楽しそうね」とかいいたが帰っていく……。

山川 それは、運動体の轉換をいう前に、広い意味で生活主体として轉換しなければいけないということじゃないかしら。

司会 そうだよ、やっぱり社会的に言えば体制を攻撃してるんだよ。

岡崎 そうね、われわれの共同体と近所との凄じいあつれきを考えれば。(笑)

土田 どっちが悪いのか。(笑)

根底としてはね、生活が危機的なのは確かだよ。食にしても、環境、教育、生活全般にわたってそれはいえる。

一方で、対症療法は出てると思うんだよ。そして、運動してるグループはいくつもある。ただ、それがかならずしも全体に伝わってない。たとえば、豚肉だって、生活クラブとか事業連系の生協はいいのを扱ってる。だけど、た

たとえばうちの地域では事業連系の生協がないから共同購入には参加できない。地方によってはちゃんとした生協組織そのものが存在してない。

つまり、部分部分としては対症療法は出てるんだが、全体としてはまだだ。それでは、自分達はどうすればいいのか。一人で対処しようとするけどこまでできるか。そこで、ある種の「生活マニアル」みたいなものを考えているんだけど、これがけっこう難しい。

ただ、そういう情報のプールをし、みんなですれを伝えるようにしていくというの、社会運動の一つの形態じゃないのか。

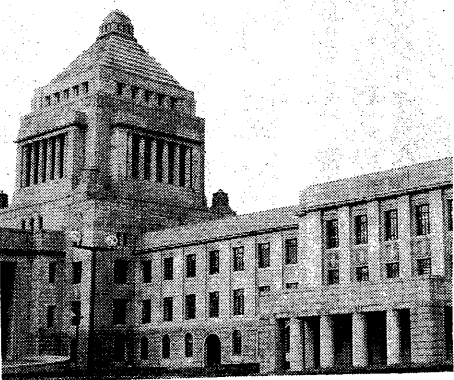
生協だって生活の全体をおちっているわけじゃない。しかも、全部を一人でできるということでもないわけだし。だから我慢しているという人も多いと思う。

四、対案は運動の対案である

司会 どうですか、「情報のプール」の話のぞくと「対案」の問題がもう一つハッキリしないように思っています。

岡崎 このあいだNHKテレビで、田中直毅が「円高と国民なんか……」という題で話をした。途中から見たんで全部話がわかったわけ

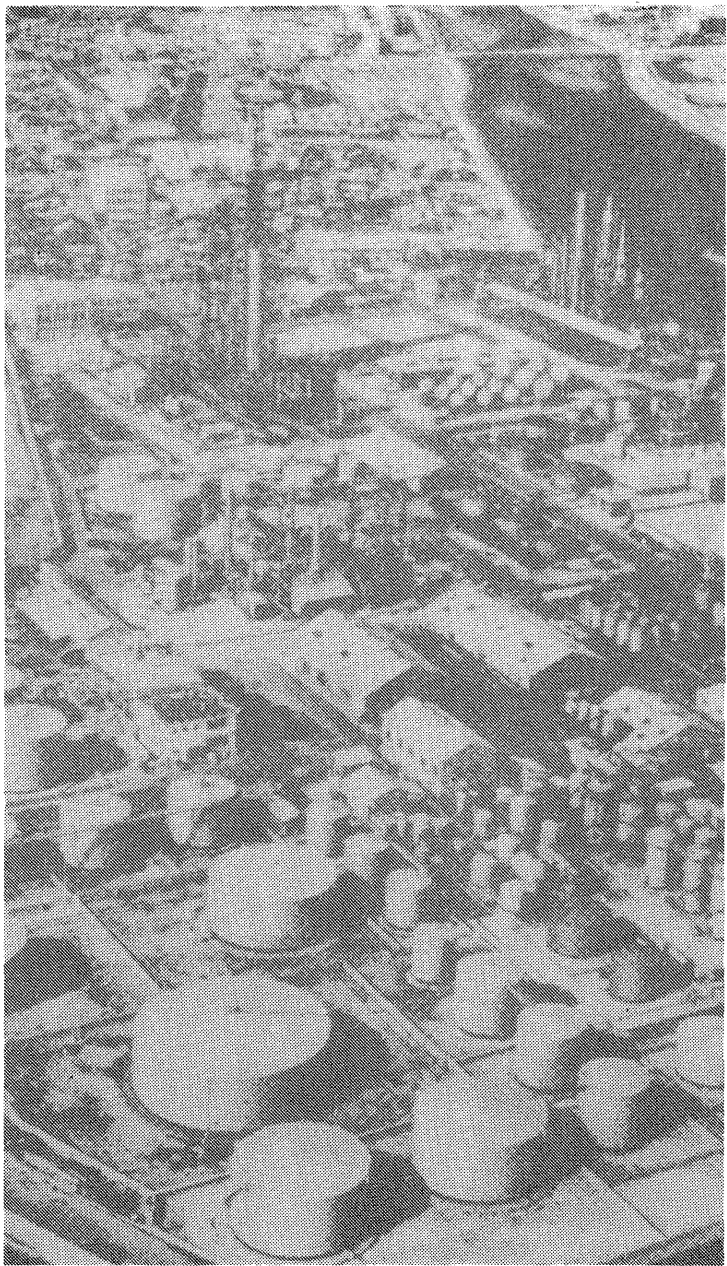
じゃないんだけど。その彼が、いわゆる中間層にむかって、日本型の労働強化でしかも個人に富が還元されない社会にとって「円高はチャンスだ」みたいなことをいっていた。賃金はもう上がらないという前提で、労働時間は年に三週間短縮できると



か、食糧は安くなるとか―農産物の自由化を前提にしたりしてゐるわけで問題はあるんだけどね。

そうすると大衆のあり方が具体的に変わってくる。これが体制の側の最大の問題として浮上してくるということもある。俺たちにとっても問題になるんじゃないか。

深川 混乱してゐるんだよね、そのへんは。たとえば、ICの生産は一時期ずつとへつてたのに、電機の職場なんかじゃ残業がへつてないところがある。それも、残業代の出ないサービスクラスというやつね。「何をしてるんだ」と聞いたら「大変だ大変だコストを下げろ」というわ



けで、そのための会議を連日やってるんだという。

「コストを下げたって、また貿易摩擦が激化するだけで悪循環じゃないか」といっても、「そういう話の通る雰囲気じゃない」という。「せめて残業代くらいもらつたら？」というのと、「それじゃ、組合としては違法な残業の存在を認めることになる」とかいうんだ。(笑)

「おい、残業を組合として拒否するんなら別だけど、実際にやっていてタダ働きというのはもっと悪いんじゃないの」とかみんなにいわれて、本人は「そうか、俺もJC官僚の意識に

合でも国民経済をどうするかというような「大きな答」が重要になってくる。それが議論できないと、職場で社会運動といつても、もう一つ説得力が出てこないんだよね。日本の小農経営をどう評価するかというような……。

山川 世界的な資本主義のシステムの機能不全というのが、民衆の生活意識をも巻込んで、予想もできなかった形で社会全体を狂わせてきている。そのことに対して、キチツといえるようにすべきだ。国民経済即ち生活の問題というような状況なんだから。

司会 これ雑誌にも関係するんだけど、昔は「大知識人」みたいのがいて、それが国論を二分するような問題について独特のバランス感覚をもとに発表し、方向を指し示すというようなことがあったように思う。今はそうした座標軸を提供できるひとがいないうし、そういう時代でもないのかもしれない。そして、マスコミやなんかの大きいところもふくめてわからないまま動いている。左も右もわかかってない。いきなりはムリかもしれないが、もう一度社会運動に足をおいて、そこから答を出していく必要があるんじゃないか。

岡崎 経済と生活が直結しているというのはそのとおりで、ホントに実感のある形で話ができるか、ということが問題だと思う。

山川 この間の「農業特集」にしてもそうだが、ただ書いていられるだけじゃダメな段階だと思う。農産物輸入自由化とかが問題になると、農業団体なんかは反対するわけだけど、その理由

が「困る」以上に出ていないように思う。「農業はみんなの問題だ」というのが―それはそれで正しいと思うが―なぜかという説得力が今一つの気がする。たんなる農民の私的利益じゃなく、普遍的なものを守っているということを積極的にいえているかどうか。

その場合、つまりこちらがモノをいう時、誰にむかっていうのか。農協？今の全農じゃどうだろう。かといって農民組合ということになるか。結論としては、農協ということになると思うが、売り込んで関係をもつ際には、働きかけ方を選ばなければならぬ。

司会 農協にも中央と各地方の農協がある。そのなかで、農業を目的とする工業といままで農協のやり方に批判が強く出ている。

山川 そういう部分との結合が重要なんだ。

一大事業としての新雑誌計画

土田 そうなってくると、雑誌に占める情報の比重が大きくなってくる。特にその分析ね。それまで「低温殺菌牛乳には殺菌能力の点で問題がある」といっていた団体が、ある日突然に低温殺菌に着手して、消費者が混乱するということスなんかもおこっているわけだから。

深川 やっぱり売り物になる情報なり理論なりでないかね。そういうものはなんとなくできてくるものじゃないから。

岡崎 そのてのみんなが欲しがらる情報ノウハウは大出版社がどんどん出しているよ。豊富な資

陥ってたか」とトボけてた。(笑) だから、円高が人べらしに結びつくことはあっても「時短」にはなかなかならないと思うよ。有給休暇の消化率なんか、かえって下がっているのだ。

大きな話も必要だ

山川 対案はやっぱり運動の対案なんで、そこをはずした作文をつくつてもダメ、というのが根本だと思うんだ。基本は企業内とか地域とかのチマチマした具体的な対案がポイントと思うが、特殊に今の状況というのは、国民経済全体、社会全体の機能不全が問題になってる。それも、現状維持ができるかどうかというギリギリの形だね。

世界的にもそうだし、特殊日本からみてみれば、そういう状況をつくり出している元凶でもあるわけだ。日本資本主義というものだけじゃなくって、日本の経営だとかいわれる「文化システム」も加わってね。

そこで、国民経済をどうするかということが―直接の運動の対案とは違う形で―特殊に重要な意味を帯びてこざるをえない。その性格付けがあることになる。

司会 たとえば、大きな企業の投資をめぐる対案ということになると、それ自体が社会的影響をもつてくるわけだが、われわれの場合、もっと狭いところからはじめることになる。農工不均衡や経済摩擦は、まず生活のあり方を問う形で現われてこざるをえない。ところがその場



金と人材を利用して、あれこれ商品としてだし続けられる時代でもあるんじゃないの。

司会 現代という時代状況のなかで、手作りの限られた力量でどのような特色を出していくのかが問題になると思うね。

土田 たとえば、知識や情報としてはバラバラに出ているけど、そういう知識や情報をどのように組み合わせれば実際に活用できるのか、或はその知識や情報がどれほど確かなものなのか、というようなことについての分析がむしろ必要だということ。あるいは、全国各地の自律的な社会運動、たとえば水俣とか、無農薬の農業経営とか、自然や緑を守る住民の闘いなどを、ていねいに現地取材するようなことが必要とされるんじゃないか。

岡崎 その場合、六〇年代の後半からいっせいに吹き出したミニコミ紙、小さなメディアは運

動状況の盛衰のなかでいずれも困難な状況に置かれてきたという、七〇年代から八〇年代はじめの総括が必要なのかもしれない。

一方で原発、自然保護等の具体的な関心をとおしたミニコミ紙は、持久的な流れとして続けられ、現在その関心を徐々に広げている状況があるんじゃないか。

深川 ちよつと言ってる意味が違うんじゃないかな。ミニコミとか運動団体の機関紙だったらそうかもしれないけれど、やはり大出版社と張り合うくらいのつもりでやらなければ出来ないと思うよ。しかも大出版社から出ている本や雑誌の情報がどこまで信じられるかということもあるわけだし、それだけ大変な事業なんだという自覚が必要なんだ。そうでなければ今いくらでも出ているわけだし。

山川 その話を引き継ぐと、みんなの具体的な関心と、社会運動総体とそのネットワーク化という全体的な理論への関心をより広い形で表現するようなオープンなものという要素が必要だろうね。

深川 やっぱりもう一度最後に言っておきたいのは、この転換は思うほどそう簡単じゃなくて、その意味では各個人が本気になって、自分をふくめて変わっていくということ。とはいっても肩ひじを張るんじゃないって、周りのものとの関係のなかで、強制関係を生み出さないような、柔軟性をもった転換であるということですよ。

司会 それでは長い討論でしたが、そろそろま

とめたいと思います。

今日の討論では、だいたい八〇年頃を境に変化してきた現代社会にたいして、われわれは七〇年代の意識感覚ではとても対応できないということを自覚し、言ってもきたんですが、もう少し根本的なところでの転換が迫られてきていたんじゃないかということ、そして、われわれ自身もそこまでの転換ということを自覚的に進めてきたかどうかという点での反省、さらに、それじゃあ、その転換は具体的な運動とはどう結びつくのかという点での突っ込み等々の点でも少し積極的に打って出るという感覚が必要なんだという提起が行なわれたと思います。

また最後に、社会運動と、そのための新しい情報紙は、限られた力量のなかでかなり厳しい、しかし重要な主体の側からの挑戦だ、ということが見えてきたと思います。また、それは自然にできてくるものではなく、現在の運動主体の側から積極的に作り出さなければならぬということだと思えます。

いずれにしても、組織の転換は今までのような単なる方針の転換ということではなく、その組織に対する考え方も含めた転換ですので、かなり腰を据えた作業になるということだと思えます。

こんな様なまとめというか、結語ということでは終らせてもらいます。

表紙のことば

ドキュメントとしての美術は、状況を取材することから反転して、美術そのものが状況であることを条件としなければならぬが、そこに起こる一つの誤りは、状況としての美術の内側で主体の位置を設定してしまうことだ。

1987年7月15日発行 第3種郵便物認可

編集 『前衛』編集委員会

発行人 高橋一雄

発行所 現代企画 ☎03-293-8564

東京都千代田区神田神保町1-64

神保町ビル203号 振替東京5-44589

購読料 4100円 (年間7共)

5600円 (密封・年間)

定 価 300円